◆ キーワード　シャマン儀礼／宗教文化／アイヌ文化／憑依

# アイヌ口承文芸に見るシャマン儀礼の再検討

北原　次郎太

## はじめに

20世紀前半までのアイヌ民族の社会では、tusu と呼ばれるシャマン儀礼が樺太・北海道の両地域において今日よりも盛んに行われ、特に樺太においては儀礼の様式の点で、シベリア諸民族との共通性が高いことが指摘されてきた。一方で、太鼓の用い方やイナウの使用などアイヌ民族独自の様式と言える要素も見うけられる。

アイヌ民族のシャマン儀礼に関する主要な資料はB.ピウスツキや金田一京助、久保寺逸彦、知里真志保らが記述したものである。近年においてはフィールドワークはそれほど行われておらず、藤村久和や和田完以降は、シャマン儀礼を取り上げた研究も稀である。一方、アイヌ文化研究に隣接する領域からは、知里らの研究を参照しつつアイヌのシャマニズムに言及することがしばしば見られるが、それらは「シャマン」や「シャマン儀礼」を「祭祀に携わる者」や「超常的な事象・能力が発現すること」といった、かなり広い意味合いでとらえており、tusu の意義が正しく認識されていない例も見られる。tonkori という弦楽器を「シャマンの道具」と見なすことはその一例である。

一般に tusu は、kamuy の力を借りることのできる特殊な人間（tusukuru、巫者）が、儀礼によって憑依現象を起こし、占いや治療を行う事を指す。また、稀に kamuy が自身の力によって占いや治療行為をすることをも指すことがある。他にも超常的な現象に関するものとして ueinkar「千里眼」、kinra ／kinta「法術」、noyporoikus「霊力による知覚」、nupur「霊力が強い」、hussa「治癒の息吹き」といった語彙がある。これらは、霊力、予知や占い、治癒など、tusu の原理や目的と近い・重複する意義を持つ。また、憑依やそれによって起こる事象にも幅があり、必ずしも全てを tusu と呼ぶわけではないが、これらについての整理が不十分であることも、tusu が曖昧に捉えられてきたことの一因となっていると考えられる。

そこで本稿は、アイヌの宗教文化におけるシャマン儀礼について、先行研究に挙げられたtusuの事例のうち、日常的実践に関するものを現象の発動原理・執行者の意識状況によって整理・類型化することと、これと対比して口承文芸中に描かれるtusuの事例について考察し、それぞれの特徴を明確にすることを目的とする。

## 一．先行研究

tusuに関する先行研究には、文学の発生その他の文化史的な関心からシャマニズムに言及したものが多い。その多くは、一般的な占い等と、tusuが不分明なまま列記されている。例えば知里真志保の「ユーカラの人々とその生活」（一九五四）の二四頁では次のように述べられている。

「アイヌの行う卜占には、いろいろあって、巫女が神懸かりになって発する託宣の他に、例えば「ニオク」（niwok）と云って、ある種のけだものや魚の頭の骨を投げて裏が出るか表が出るかで吉凶を判断したり、「サイモン」と云って、有罪無罪を判断するのに、「カモカモ」という水の三升五合も入った器を飲み干させたり、真赤に焼いた鉄を掴み取らせたり、ぐらぐらに湯を煮たてた鍋の底から小石や刀の鍔などを取出させたりする卜占の方法がありました。このサイモンという語はシャーマンという語の訛ったものと考えられます。その他、火の神に捧げる木幣を炉の灰の上に立てて、それが燃えて倒れる方向で吉凶を判断するものもありました。また針占、刀占、弓占など、いろいろな卜占があったようであります」

また、知里の「呪師とカワウソ」（一九五二）などには、人文神okikurmiの語源解釈（金属製装飾付き衣装をまとったシャマン）や、樺太で女性が着用した金属製装飾帯をシベリアのシャマンの装具と関連付けるなど、視覚的イメージの類似からシベリアのシャマニズムとの連続性を見ようとする傾向がある。このほか、久保寺逸彦の「アイヌの音楽と歌謡」（一九三九）や、知里の「アイヌの歌謡　第一集」（一九四八）、金田一京助の「芸術及娯楽」（一九四四）などでは、現存の諸文学が巫歌から発生したとする見解や、tonkori（五弦琴）をシャマンの祭具とするなど、楽器・歌謡全般をシャマニズムと結びつける論調が見られる。これらの研究においては「シャマン」が「占い・呪いの執行者」といったごく広い意味で用いられている。彼らの関心は、アイヌ文化がかつてあった姿に向けられており、同時代に展開していたtusuの実情に注意が払われていない。金田一は「原始文学断想」（一九二九）、「神がかりの話」（一九二九）などにおいて「優れた女はアイヌではみな巫女であった」といった見解を述べているが、そこで挙げられた事例には、tusuの事例と、後述するimuの事例とが混在し、日常的実践と文学中の事例も同列に扱われている。

imuについては知里の「呪師とカワウソ」（一九五二）の中で、

三つの類型が立てられている。

①驚いた時に発する反射的な動作、口走る文句

②特定の刺激に対するヒステリー反応（反響・反発）

③巫術の場面での跳躍（美幌地方の叙事詩に一例だけ見られる）

知里は③を一般化して、imu の本来の意義を論じているが、一例しかないものを一般化して論じることは適切ではない。一般的な imu はもっぱら①と②に相当する現象である。imu が tusu に関連して言及されることが多いのは、それが憑神に依って引き起こされると考えられるためである。しかし、imu は、当事者の意図と無関係に起こることや、引き起こされた行為はそこで完結するものであり、内容も毎回決まっている。何らかの事態解決につながる行為でもないという点において、他の超常的な行為・現象とは区別するべきである。

## 二．超自然的行為・現象の発現過程の諸類型

アイヌ文化において、巫力（霊力）の源泉は turenpe（憑神）や sernak（背後の神）に由来すると考えられている。こうした神は誰にでも憑いてその人物を守っていると考えられ、その意味ではアイヌ文化において、憑依は日常的なごくありふれた現象だといえる。憑神は当人の背後、とくに襟首あたりというごく近い距離にいる場合と、高山や天空の上といった遠隔地から見守っている場合があるとされる。これらの神が持つ力が当人にも影響を与え、巫力を行使できる場合もあるが、それらがすべて tusu の形式を取るわけではない。したがって、アイヌ文化においては「巫力がある」ことと「巫術をする」ことは別であるといえる。

ここでは佐々木宏幹の『シャーマニズム』（一九八〇）に示された憑依現象の三類型を参考に、アイヌの憑依について整理したい。佐々木が示した類型は以下の通りである。

（一）神・精霊が当該人物の身体の中に入り、人格転換が行われ、彼（彼女）は霊的存在として振舞い、「吾れは某々の神であるぞ！」のように第一人称で語る。口寄せ巫女として知られるイタコやカミサンは、死者の霊を憑依させると、死者自身として語り出す。またシャーマニックな新宗教の教祖も、この型に属する者が多い。諸外国のシャーマンもトランスに入ると、第一人称の自己表現をするのが一般的である。

（二）神・精霊が当該人物の身体には入らないが、リアルに姿を見せ、直接身体に接触して、胸部を圧迫したり、手足をつかんで振り廻したりし、神意を伝える。彼（彼女）は、「神さま、しかじかのことについて、何とぞ教えてください」と願い、霊的存在の答を「はい、はい、わかりました」などといって受け、これを依頼者に伝える。この場合、当人には人格転換は起らないので、霊的存在との直接交通も、第二、第三人称を用いて行われる。

（三）神・精霊が当該人物の身体に入ることもなく、またその身体に直接接触することもないが、彼（彼女）の眼、耳、心を通じてその意志を伝える。「神さまに悟らせられる」とか「神さまにしゃべらせられる」という状況である。遠くから身体の悪い人が訪ねてくるとして、もしもその人が霊の影響を受けているとすると、悪いところの痛みが自分に現れるという。霊との交渉は第三人称で表現されることが多い。

これを参考に、実生活上の体験として語られる超常的な行為・現象を「非憑依型」と「憑依型」にわけ、さらにそれぞれをabの二つに区分した。

**非憑依型a　神、神孫、死者が直接的に能力を行使するもの**

神が生得的な巫力によって行うもの。人間がこれを行う場合も、系譜をたどると神孫であることになっている。あるいは、死者（肉体を離れて霊的存在になった状態）となると、こうした能力を行使できるとされる。

・kinra（法術）千里眼や飛行などの能力を発揮する。
・sitakante（夢を見せる）守護神・死者などが夢で託宣する。
・katukar／ramukara（心理操作）神が特定の者の人格を占有し言動を操る。

**非憑依型b　呪具の力によって行うもの**

執行者は特別な能力を持たず、動物骨や祭具類の力によって実現する。いわば、誰が行っても、道具さえあれば一定の結果を得られるものである。一般的な儀礼における祈願や、tonkoriを用いた魔除けなどはこれに当たる。この種の行為に用いられる祭具類を以下に列挙する。

・sirakkikamuy（守護神）動物や魚の頭骨を頭上から落し、落ちた時の状態で吉凶を判断する。
※この占いをninok（室蘭、静内、天塩）、niwok（胆振、沙流、美幌、足寄）、niok（静内、屈斜路、塘路、鶴居）、ninot（斜里）と呼ぶ。木椀が使われることもある。
※niwokは占い一般にも使われる。本別ピリベツでは肉の中に隠す小木片を「niokkuni」という。
鶴居ではヤナギの皮を使った占いを「niokku」という。
※『アイヌ民族誌』に釧路地方の語彙としてkamuytusuという記載があるが、詳細不明。更科源蔵は同地方でこの種の占いを指す語違としてkosirakkiやniokを記録している。kamuytusuは特殊な表現か。
・panka（木偶）紐でつり下げて、揺れ方で占う。樺太の事例。
・inaw（木幣）供物であり祈願内容を伝達する仲介者でもある。しばしば護符ともなる。儀礼後にinawに点火し、燃え方で占いをすることがある。また、儀礼の翌日までinawが祭壇に立っている／倒れているかも神意の表れとされる。inawが

立っていれば、供物と祈願が受け入れられたと解釈される。

- ikupasuy（捧酒箆）供物である酒を運び、祈り詞を神々に伝える。
- sapaunpe／paunpe（礼冠）儀礼時に着用すると、身に着けた者の言葉を補って神々に伝える。
- emus（礼刀）同前
- kiseri（煙管）同前
- tonkori（五弦琴）演奏によって、嵐を止ませる、戦時に敵方を眠らせる、病魔を遠ざけることができるとされる。
- rerasueyp（うなり板）一端に縄をつけて振り回し、音を出すことで風を呼ぶことができるとされる。
- iyokpe（鎌）風止めなどに使う。
- nisu（臼）難産の際、産婦に抱かせる。大風の時に、家が飛ばぬよう祈願する。
- iyutani（杵）地震の際、唱えごとをしながら地面を突く。
- muy（箕）赤ん坊を載せてゆすると丈夫になる。
- poniak（呪文）祭具ではないが、定型的な文言を口にすることで他者を害するよう、悪神を誘導することができるとされる。

### 憑依型a　人格占有／交替なし

人間が憑神の力によって行うもの。先天的／後天的資質（こうした行為を行わせる憑神を伴っている）を要する。執行者の意識を保ったまま行う。

- ueinkar（透視・千里眼）遠くの情景、隠れた物を見通す。
- kinra（法術）千里眼や飛行などの能力を発揮する。
- hussa（息吹き）霊力のこもった息吹を治癒または攻撃のために吹きかける。
- noyporikus（感痛）十勝地方で報告が顕著。名寄でも。頭の痛みで人や動物の接近などを察知する。
- ihuminu（感通）身体と別の場所が感応し、遠隔地での現象を身体の感覚として感じる
- tekeynu（手当）掌に特別の霊能があり患部に当てると治った。
- ikoinkar（助産）助産をさせる憑神は襟首にいる。難産の際には inaw kike を頭にかけたり、手首に付ける。

### 憑依型b　人格占有／交替あり

人間が憑神の力によって行うもの。先天的／後天的資質（こうした行為を行わせる憑神を伴っている）を要する。執行者は意識を失い、術中の記憶がない。

- tusu（巫術）自律的に憑依を起こす。術中は執行者の意識と無関係な言動をする。憑依する神はある程度固定的。
- tusu2（巫術）憑依が他律的に起こる。執行者の意識と無関係な言動をする。憑依する神はある程度固定的。
- tusu3（巫術）偶発的な憑依によって起こる。執行者の意識と無関係な言動をする。憑依する者は神・死者霊など非

固定的。しばしば巫者以外にも起こる。

このように日常的実践のうちtusuと呼ばれるのは憑依型bのみであり、いずれも人格交替を伴う。もっとも、シャマンは非憑依型bや、人格交替を伴わない憑依型aの行為も取り混ぜて占いや治療行為をする。憑依型bはシャマンの心身への負担が大きいとされ、他文化のシャマンにおいても成巫後の初期は憑依型bの儀礼を中心に行ない、徐々に憑依型aや非憑依型bを中心とした実践に移行していく傾向にあると言われる。

## 三　日常的実践の事例

次に、樺太・北海道のtusuの事例を挙げる。樺太のtusuには、自律的な憑依が多く見られ、北海道の事例には他律的な憑依も見られる。

### 樺太の事例

事例一　東海岸　出典：ピウスツキ「サハリンアイヌのシャーマニズム」（一九〇九）より、抜粋、要約。

・アイヌ社会におけるシャマンは、他の民族のシャマンに比べ、それほど高い地位にない。成巫の過程は非自発的。思春期～青年期に物思いや幻覚を体験する（kosinpu（憑神）に宿所として選ばれたと解釈される）。突如トランス状態になり、周囲の者から太鼓を渡されてtusuをする。いつトランス状態になるかわからないため、成巫後は狩で山に入ることを止める。

・tusuを行わせる憑神は、世襲されることもある。tusukuruは頭の上を飛び交う憑神を持つと同時に、特別な神（月や火や高峰）を祭る。その際は鳥や狼が使者を務める。巫術のあいだ、憑神となる動物の声や仕草をまねる。憑神は神々の元へ赴き、託宣を得て帰ってくる。

・tusuは戸を閉ざして行う。囲炉裏に松葉をくべ、煙が充満する中で太鼓の演奏と歌が始まる。様々な動物の声を出す。悪霊の憑依に警戒し、takusa（inawの一種）で払う。四十五分ほど儀礼を続け、休みつつ歌ううちに託宣が聞こえる。巫者はこの時言ったことを覚えていない。託宣の後、しばらく踊りtakusaを振る。これで憑神が帰って良いという合図になる。

・シャマンは天候や近い未来の事を聞かれると気軽に教える。シャマンの託宣には人格交替が伴う。天候などの相談には非憑依的な方法で応じている。悪霊による偶発的な憑依も起こりうることが示されている。

事例二　東海岸白浜村　出典：知里・和田「樺太アイヌ語における人体関係名彙」（一九四三）女性巫者による儀礼の実見記録。

・装束や次第は事例一とほぼ同じ。tusuはあまり長くやっていると邪神が邪魔をしにくるから適当な時間で止める。巫者

となる修行のようなものはなく、子供のころから見て体得する。邪神についての記述から、意図しない憑依が起こる可能性もあることが示されている。

事例三　東海岸新問村　出典：山本『北方自然民族民話集成』（一九六八）女性巫者の談話。

・巫術をkintaあるいはtusuという。憑神はkosinpuというが、自分の方ではtopociという。「topociよ降りてこい」と太鼓を叩くと、雲の上からtopociが降りてきて、太鼓に声がする。太鼓が自分に話すことを、自分が他に向かって話す。

この事例では憑神は、遠隔地から来訪する存在として語られる。人格交替は起っていないように読める。

事例四　東海岸小田寒村　出典：更科源蔵『コタン探訪帖』17

・tusuをする者は、海水にトロロ昆布と蝦夷松の葉を入れた物を飲む。

・カラスが憑くとクワークワーといい、小鳥が憑くとチューチューという。ヘビが憑いた者はヘビの皮を食べる。

この記述は、巫者によって様々な動物霊が憑神となる、あるいは一人の巫者に憑神が複数存在するという二通りの意味に取れるが、事例一や事例五と考え合わせれば後者であろう。

事例五　西海岸来知志村　出典：久保寺逸彦採録資料（北海道立アイヌ民族文化研究センター所蔵資料、「民俗調査サハリン2（KC800059）」～「民俗調査サハリン3（KC800062）※旧番号」および更科源蔵『コタン探訪帖』16、17より

・成巫の過程は非自発的。四十才を過ぎた頃、歌を歌いたい衝動が抑えられず巫歌を歌った。先祖のtusukamuyに憑りつかれていると言われた。後に太鼓を使うようになった。

・tusuの始めに松葉を火にくべると、その匂いにtusukamuyが集まってくる。自分はクマやniskurukamuyが憑神だ。そこで太鼓をあたためて叩いていると、太鼓に神が乗り移り、やがてtusukuruに乗り移る。

・神を呼ぶときは何か捧げ物を用意しなければ呼べない。

・kamuyhahka（冠）はなくとも良いが、ある方が良い神が来る。tusutakusaは悪魔を払ってくれる。

・託宣はinuu aynuやkamuy oruspe nuu aynuと呼ぶ者が聞き取る。

巫者は複数の憑神を持ち、どの神が憑依するかは予測できない。憑依により人格交替が起こる。偶発的な憑依も起こる。

### 北海道の事例

事例一　南西部幌別郡幌別村　出典：金田一「神がかりの話」（一九二九a）女性の事例。

・この女性の憑神は龍神。山仕事中に落雷に驚いて失神し、以来憑かれたという。

・この女性の娘が大けがをしたとき、その女性の兄が inaw を女性のえり首にかけ「もしもこの娘にして、いざという事があったら、弟の家が、あとが絶える。何神が障ってこういうことをしたか、障る神をあらわしうくれ」と祈ると女性は気絶した。介抱すると、親戚の男性の亡妻そっくりの声で、夫が若い後妻を迎えたことへの怒りを語った。

・あるとき村民のいさかいの場面で、前記の女性が失神した。神の憑依らしく思われたので、女性の兄が inaw を削り「何神が憑いたかしらぬが、何神でもあれ、この争の元を明かしてくれ」と祈ると、大声で歌い始め、村民の一方が嘘を言っていると告げた。

・昭和三年、女性と娘の二人で在宅時、女性がしきりに欠伸をした。これは憑依の兆候だが、inaw を削る男性が不在だったため、代わりに赤い布を首へ巻き付けて『今この家には、誰も男がいなくて、御幣を削って物申す者が誰もない。ただ貧しい女どもばかりで暮らしているのであるから、善い神か、悪い神かどちらか知らぬが、この人はもう何にも出来ない年寄りだのに、可哀相に痛めないで置いて下さい。若しかしたら熱に浮かされて言ったのかも知らぬが、とにかくこの布ぎれをお前に上げるから、欲しければ持って早く外の所へ行ってお呉れ。今ではみなトノイレンカ（殿様の法律）になって、アイヌの習慣は追わない世の中に成り、昔ながらの難しい振り合いは跡方もなくなっているのだから早く行ってお呉れ』と祈って事なきを得た。

巫者と憑神の関係はある程度固定的に捉えられているが、不特定の神や死者が憑依することもあると考えられている。憑依の経緯は他律的または偶発的であり、本州の事例に似る。

事例二　南西部虻田郡虻田村ベンベ　出典：金田一「神がかりの話」（一九二九 a）幌別の女性が伝聞として語ったもの。

・クモと、洞爺湖の竜神を憑神とする女性が、災難や病気の際に相談を受けて託宣を出した。

軽い事件にはクモが憑き、難題の場合には竜神が出る。トランス状態に入るとそれぞれの神を彷彿とさせる巫歌を歌うため、どちらが憑依したかがわかる。竜神が憑いた時には形相が変わり、光を放ち厳かな調子で歌う。

特定の憑神を持ち、自律的に人格交替を起こす。憑神は常時巫者に憑いているのではなく、巫術によって遠隔地から呼び出す。この事例は伝聞であり、発生から一定の年月を経ていることがうかがえる。定型的で様式化した巫歌や、巫者の描写などは、他の実体験の語りに比べ、より文学的な印象を受ける。

事例三　地域不明（複数地域）　出典：和田「アイヌのシャマニ

ズム」（一九七八）

・北海道の tusukur は、数珠を手にし念仏を唱えて「かんがかり」し、死霊の口寄せをする。時に竜神さまのお告げをする。

堀が昭和二十六年に体験した日高の tusu も金毘羅信仰と結合した口寄せであり津軽以南の巫俗と融合が見られる。和田自身の調査した巫術の例はいずれも男性の祈りによって女性への憑霊が誘発される他律的な物。

事例四　南西部千歳市　出典：更科源蔵『コタン探訪帖』19

・tusu の際は、inawkike と赤い布（白と赤でもよい）を撚りわせてガラス玉に通した物を手か首にしばる（憑神に捧げる）。手には何も持たない。

・巫者にも良い者と悪い者がいる。tusu が終わると、憑神に捧げる inaw を巫者の首にかけてやる。ヘビが憑神のときはクルミの木で inaw を作る。これをかけると巫者は体が楽になる。やらないと体が痛み、動けなくなる。憑神が pawci の場合はヤナギの inaw を作る。kinra も憑く。狼が憑いた者は良い。キツネが憑くと良い時と悪い時がある。

事例五　北部旭川市近文　出典：更科源蔵『コタン探訪帖』19

・tusu には玉などは使わない。tusu をしたあとは二日位寝込む。

事例六　南部日高郡様似町　出典：更科『アイヌ伝説集』（一九八一）

・アポイ岳に信仰を集めるカバの大木がある。鹿狩に行ってアオダモでイナウを二本作って捧げた。その日は鹿の声が聞こえているのにまったく取れなかった。狩小屋へ戻ると同行した女性の様子がおかしい。「何バカやってる」というと「バカはおまえだ。せっかく鹿をやろうと思ったが、あのようなつまらないイナウを立てたので鹿をやらなかったのだ」といって散々棒で殴られた。山の神が乗り移ったのだ。

偶発的な憑依の事例。

## 四．文学中の事例

次に、文学中の事例を挙げる。文学中の tusu では人格交替が起こらない点が特徴的である。なお、今回は英雄詩曲の事例が中心になったが、異なるジャンルでは、tusu の描かれ方も異なる可能性がある。

### 樺太の事例

事例一　樺太東海岸魯礼村　叙事詩　出典：金田一「原始文学断想」（一九二九 b）

・とある少女が一人で巫術によって育ち、くらしていた。ある

日、家にあった黄金のkaco（太鼓）などを発見し、身に着けて初めて本格的な巫術を行なった。「わが憑物をすっかり我にかぶり」小屋の苫の端を巫力によって持ち上げ、はるかに隔たった見知らぬ村を見ているうちに主人公の危難を知る。身支度をして救援に向かい、敵方の巫者と巫力を戦わせて主人公を救出する。

太鼓を打つうちに憑神が憑依し超常的な力を発揮する。「より遠くまで見よう」という巫者の意志が働いており、人格交替は起っていない。

事例二　樺太東海岸富内村　叙事詩　出典：金田一『北蝦夷古謡遺篇』（一九一四）

・とある少女が一人で巫術によって育ち、くらしていた。ある日、kimraによって主人公の危難を知り、赤銅のkaco（太鼓）を打ち神の舟に乗って救援をする。hussaによって主人公を回復させる。

憑神や憑依の描写は見られない。人格交替は起っていないと考えられる。

事例三　樺太東海岸元泊村斑伸　散文説話　出典：知里「樺太アイヌの説話」（一九四四）

・空き家に住み、通りがかった人を殺害する魔物を退治するため、tusukuh（巫者）が三人呼ばれる。tusuをするうちに神々が現れ、神の矢、刀を打ち込んで魔物を退治する。

憑神は遠方から呼び出される。憑神が魔物と直接戦うという点がアイヌの説話としては特殊。巫術中も憑神はtusukuhと離れた位置にいると考えられ、憑依・人格交替は起っていないと考えられる。

事例四　樺太西海岸来知志村　出典：山本『樺太自然民俗民話集成』（一九六八）

otasuh村にすむ兄妹の妹に憑神（kosimpu）が憑いて、兄妹の仇敵が住む村の場所を知らせる。仇敵の村へ行き、家の中を見ると仇敵の妹の一人がいた。彼女も巫者で、太鼓を叩いて敵（主人公）の接近を察知していた。だが、主人公たちがクモの糸で姿を隠していたため居場所がわからず、どこへ行ったかと考えていた。

この事例でも人格交替は起っていないと考えられる。ueinkarに近い事例。兄も水上を走る、姿を消すなど超常的な力を発揮。

事例五　亜庭湾白主村　散文説話か　出典：知里「ユーカラの人々とその生活」（一九五四）

巫者が縄抜けをする際、大きい目の網の方が抜けにくいものだ。ある時、白主の巫者が四寸目の網に入れられてどうしても抜けられず、方々の神に頼んだ後、炉の灰ならしの神さまに頼んでやっと出してもらえた。

この事例でも人格交替は起っていない。不特定の神々から助力を得て奇術をする様子が語られる。

事例六　樺太西海岸来知志村　散文説話　出典：村崎『樺太アイヌ語　資料篇』（一九七六）

ライチシカ湖に二人の兄弟が住み、弟は巫者だった。二人はワシの羽を集めてアムール方面の人々へ売っていた。あるとき、兄がワシ羽を独占しようとしたので、弟は腹を立て、太鼓を叩きながら海を渡ってアムール方面へ行ってしまった。弟の死後、彼の遺体を納めた棺が流れてきて川をさかのぼり、ホントケシという場所へ流れ着いた。

憑神や憑依の描写は見られない。人格交替は起っていないと考えられる。

事例七　樺太西海岸来知志村　散文説話　出典：村崎『樺太アイヌ語　資料篇』（一九七六）

oyanuruという大村の住人が化物に喰いつくされた。雲の上にいたwenenekaype samunekaypeという神の翁が様子を見に降りると、赤ん坊が生き残っていたので育てることにした。子供が大きくなり、神翁は帰ることにした。子供が神翁を槍で突くと翁は死んだ。外に出てみると、神翁が太鼓を叩きながら昇天するのが聞こえた。

神が自ら太鼓を叩いて空を飛ぶ。法術のような描写。

## 北海道の事例

事例一　南西部幌別郡幌別村　叙事詩　出典：ポン・フチ『アイヌ語は生きている』（一九八七）

「omnpesunnat」。主人公の敵方にありながら主人公に加勢する女性は、巫力によって様々な出来事を察知する。敵方の女性が戦いの顛末を占う。酒杯を受け、囲炉裏のそばでtusu repni　kani repni（巫術の拍子棒　金の拍子棒）を以て巫歌を歌ってトランス状態になる。主人公と味方の女性が巫力を使って巫歌を妨害しようとするが、うまくいかない。やがて巫歌が終わると、主人公の城の様子や主人公がすぐ近くに来ている事を暗示し、戦いが敵方の惨敗に終わることを予言する。

叙事詩中の憑神は無数に女性の周りを飛んでいるとされ、何の神が憑いたかの言及はない。より遠くを見透かそうとする巫者の意識が働き、人格交替は起っていない。脱魂型の巫術か

ueinkar に近い。

事例二　南西部日高沙流郡平賀村　叙事詩　出典：久保寺『アイヌ叙事詩　神謡・聖伝の研究』（一九七七）

「kutunesirka」。主人公と対立する首長たちの妹が、戦いの顛末を占う。nuputcannoyep（巫術の鉢巻き）をつけ、周囲には多くの憑神が明滅している。酒杯を飲み干し、tusuponrepni（巫術の小拍子棒）で炉辺を打って歌い出す。トランス状態に入り、巫歌を終えると、主人公の接近を暗示し、戦いが敵方の惨敗に終わることを予言する。

憑神は無数に女性の周りを飛んでいるとされ、何の神が憑いたかの言及はない。より遠くを見透かそうとする巫者の意識が働いており、人格交替は起こっていない。脱魂型の巫術か ueinkar に近い。

事例三　南西部日高郡平取町紫雲古津　叙事詩　出典：金田一「アイヌの宗教」（一九二五）

「八つの肉串の戦の原となる物語」。主人公と対立する首長たちの妹が、次々と戦いの顛末を占う。酒を飲み歌い出す。巫女たちはトランス状態に入り、これから起こる戦いの光景を目前に見ながら歌う。

叙事詩中の憑神は無数に女性の周りを飛んでいるとされ、何の神が憑いたかの言及はない。より遠くを見透かそうとする巫者の意識が働き、人格交替は起こっていないように思える。ueinkar に近い。

## 五．結語

以上検討してきたことをまとめる。

先行研究において、しばしば tusu と関連付けられてきた imu は、占いや治療、託宣とは無縁であることから、tusu についての議論からは一旦外し個別検討すべきである。

日常的実践において tusu と、その他の諸儀礼・超常的現象を分けるのは「人格交替を伴う憑依現象」の有無である。これまでの研究では動物骨や祭具の力によって行う占い等（非憑依型 b）と憑依型 a・b を混同する場面があったが、これは明確に区別すべきである。tusu を起こす憑神は、常に憑依しているのではなく遠方から飛来する事例が多く見られた。この点は、一般的な憑神の在り方と異なる。北海道の tusu は、死者の霊が偶発的に憑依した事例を多く含む。樺太においては、死者が憑依する例は未見である。

次に、文学中に描かれる tusu は樺太、北海道ともに人格交替を伴わないものであった。また、巫術によって行う事柄は飛翔や海上を走るなど、超現実的な能力の発揮が多く見られた。

本稿での検討によって、日常的実践と文学中の tsu の差異がある程度明確になったように思う。ただ、参照した文学の事例が少ない事、特にジャンルに偏りがある事、人格交替の有／無をより明瞭に判定する方法の吟味が課題として残った。いずれ機会を改めて検討したい。

## 参考文献


上田紀行「エクスタシーの行方」『岩波講座現代社会学7〈聖なるもの／呪われたもの〉の社会学』一九九六　岩波書店

荻原眞子『北方諸民族の世界観　アイヌとアムール・サハリン地域の神話・伝承』一九九六　草風館

金谷栄二郎・宇田川洋『樺太アイヌのトンコリ』ところ文庫2　一九八六　常呂町郷土研究同好会

北原次郎太「tonkoriとシャマニズム」『itahcara』創刊号　二〇〇三　itahcara 創刊号編集事務局

金田一京助「美術及娯楽」『東亜民族要誌資料第二輯　アイヌ』　一九四四　帝国学士院東亜諸民族調査室編 帝国学士院

金田一京助『北蝦夷古謡遺篇』（『金田一京助全集　第九巻アイヌ文学Ⅲ』）一九九三（一九一四）三省堂

金田一京助「アイヌの宗教」『金田一京助全集　第十二巻アイヌ文化・民俗学』一九九三（一九二五）三省堂

金田一京助「神がかりの話」『金田一京助全集　第十二巻アイヌ文化・民俗学』一九九三（一九二九a）三省堂

金田一京助「原始文学断想」『北蝦夷古謡遺篇』（『金田一京助全集　第七巻アイヌ文学Ⅰ』）一九九三（一九二九b）三省堂

金田一京助『アイヌの神典―アイヌラックルの伝説―』（『金田一京助全集　第十一巻アイヌ文学Ⅴ』）一九九三（一九四三）三省堂

久保寺逸彦「アイヌの音楽と歌謡」『民族学研究』第5巻5・6号一九三九

久保寺逸彦『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』一九七七　岩波書店

久保寺逸彦編『アイヌ語・日本語辞典稿』一九九二　北海道教育委員会

クレイノヴィチ，E・A・著・桝本哲訳『サハリン・アムール民族誌―ニヴフ族の生活と世界観』一九九三（一九七三）法政大学出版局

近藤鏡二郎・富田歌萌「アイヌの弦楽器〝トンコリ〟」『音楽学』第9巻　一九六三　音楽学会

佐々木宏幹『シャーマニズム』一九八〇　中公新書

更科源蔵『アイヌ民話集〈増補改訂版〉』一九七〇　北書房

更科源蔵『アイヌ伝説集』一九八一　みやま書房

更科源蔵『コタン探訪帖』1～20（弟子屈町図書館所蔵）

J・バチェラー著・安田一郎訳『アイヌの伝承と民俗』　一九九五　青土社

谷本一之「アイヌの五弦琴」『北方文化研究報告』第13輯　一九五八　北海道大学

谷本一之『アイヌ絵を聴く』二〇〇〇　北海道大学図書刊行会
谷本一之「トンコリ（アイヌ）とナルスユク（ハンティ）―北の五弦琴の形成―」『北方諸民族文化のなかのアイヌ文化―文化交流の諸相をめぐって―』北方民族博物館編第16回北方民族文化シンポジウム報告　二〇〇二　北方文化財振興協会
知里真志保「樺太アイヌの説話（一）」『知里眞志保著作集』1　一九七三（一九四四）平凡社
知里真志保「アイヌの歌謡―第1集―」『知里真志保著作集』第2巻　一九七〇（一九四八）平凡社
知里真志保「呪師とカワウソ」『知里眞志保著作集』2　一九七三（一九五二）平凡社
知里真志保「ユーカラの人々とその生活」『知里眞志保著作集』3　一九七三（一九五四）平凡社
知里真志保「アイヌに伝承される歌舞詩曲に関する調査研究」『知里眞志保著作集』2　一九七三（一九六〇）平凡社
知里真志保『分類アイヌ語辞典　人間篇』（『知里眞志保著作集別巻Ⅱ』）一九七五（一九五四）平凡社
知里真志保「樺太アイヌの神謡」『北方文化研究報告』第4輯　一九八七（一九五三）思文閣出版
知里眞志保・和田文治郎「樺太アイヌ語に於ける人体関係名彙」『樺太庁博物館報告』5-1　一九四三　樺太庁博物館
富田歌萌「アイヌの弦楽器〝トンコリ〟」『北海道の文化10』一九六八　北海道文化財保護協会
N・G・マンロー著・小松哲郎訳『アイヌの信仰とその儀式』二〇〇二国書刊行会
藤村久和・平川善祥『民族調査報告書　資料編Ⅰ』一九七三北海道開拓記念館
ピウスツキ，B（PILSUDSKI, B）・和田完訳「サハリン・アイヌのシャーマニズム」『サハリン・アイヌの熊祭　ピウスツキの論文を中心に』一九九九（一九〇九）第一書房
ポン・フチ『アイヌ語は生きている　ことばの魂の復権』一九八七（一九七八）株式会社新泉社
村崎恭子『樺太アイヌ語　資料編』一九七六　国書刊行会
村崎恭子『浅井タケ口述　樺太アイヌの昔話』二〇〇一　草風館
山本祐弘『北方自然民族民話集成』一九六八　相模書房
和田完「南樺太土着民における偶像」『北方文化研究報告』第7冊　一九八七（一九五八）思文閣出版
和田完「アイヌのシャマニズム」『シャーマニズムの世界』〈新装版〉一九九五（一九七八）株式会社春秋社
和田完「サハリン・アイヌの偶像」『サハリン・アイヌの熊祭　ピウスツキの論文を中心に』一九九九（一九五九）第一書房
Neil Gordon Munro　1996(1962)『AINU CREED AND CULT』THE KEGAN PAUL JAPAN LIBRALY vol.4
B.Z.Seligman(ed.), Kegan Paul International.
（きたはら・じろうた／北海道大学アイヌ・先住民研究センター）